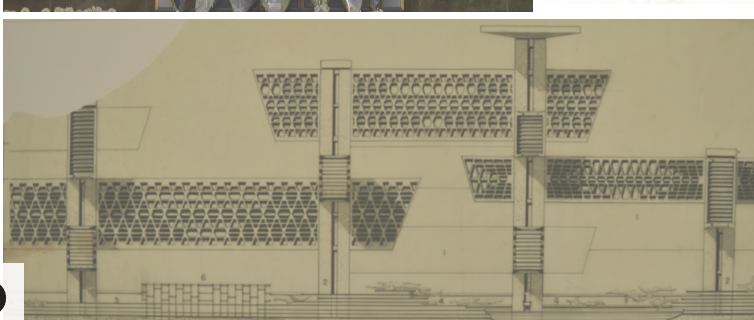
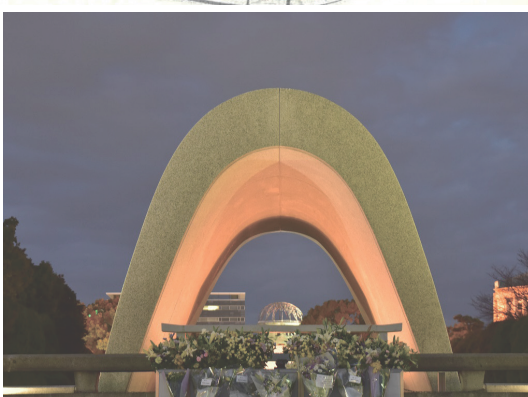
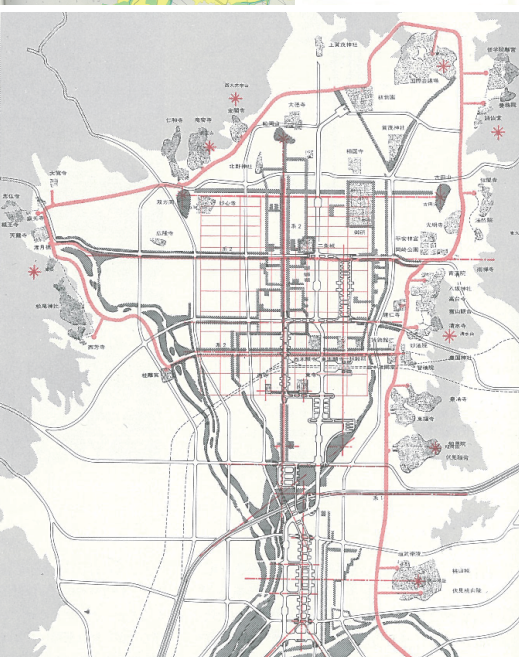
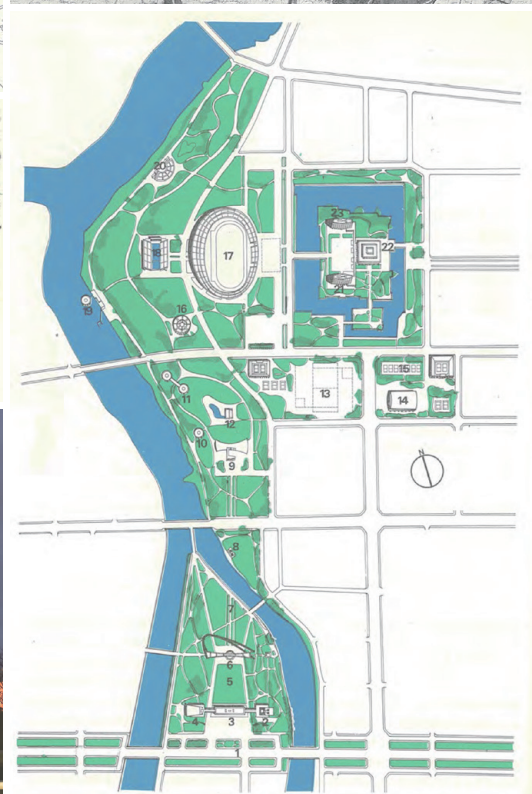
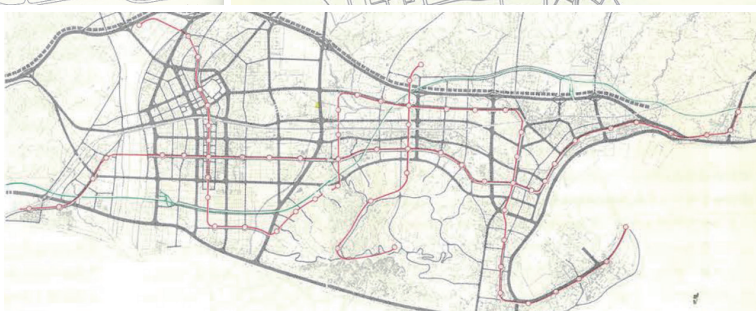
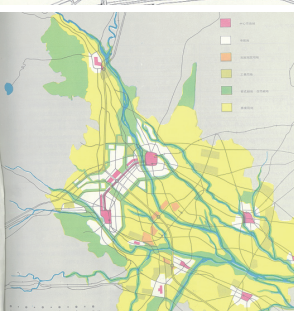
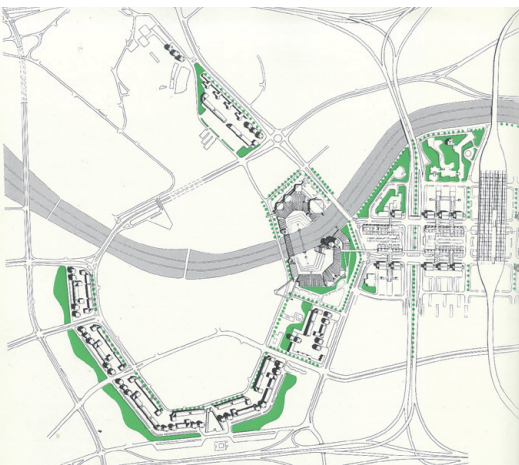


Urban Design Lab. Magazine

都市デザイン研究室マガジン

vol. 280 /
Jun. 30th 2019

6

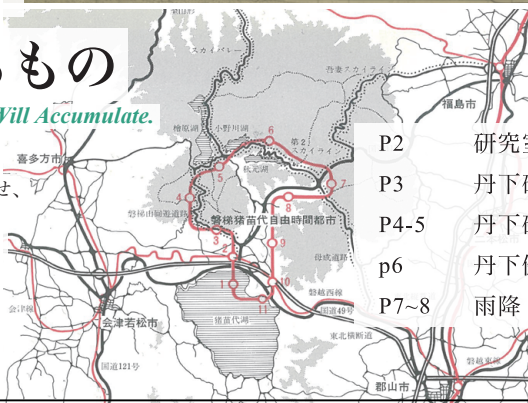


積み重ねてきたもの

これから積み重ねるもの

What We Had Accumulated, What We Will Accumulate.

雨は土地の積層に浸透し、恵みをもたらす。
今回のマガジンでは研究室の積層を浮かび上がらせ、
今の活動をより花開かせたい。
研究室の歴史と、雨の日に訪れたい地を特集する。



- P2 研究室の歴史をひもとく
- P3 丹下研の時代
- P4-5 丹下研の活動を振り返る
- p6 丹下健三の教育
- P7-8 雨降りの日に足をのぼして、Information

編集長：前山倫子 編集部員：原洪太、藤原大樹、山口智佳、應武遥香、西野一希、宗野みなみ

東京大学都市デザイン研究室 <http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/>

研究室の歴史をひもとく

Read the History of Our Laboratory

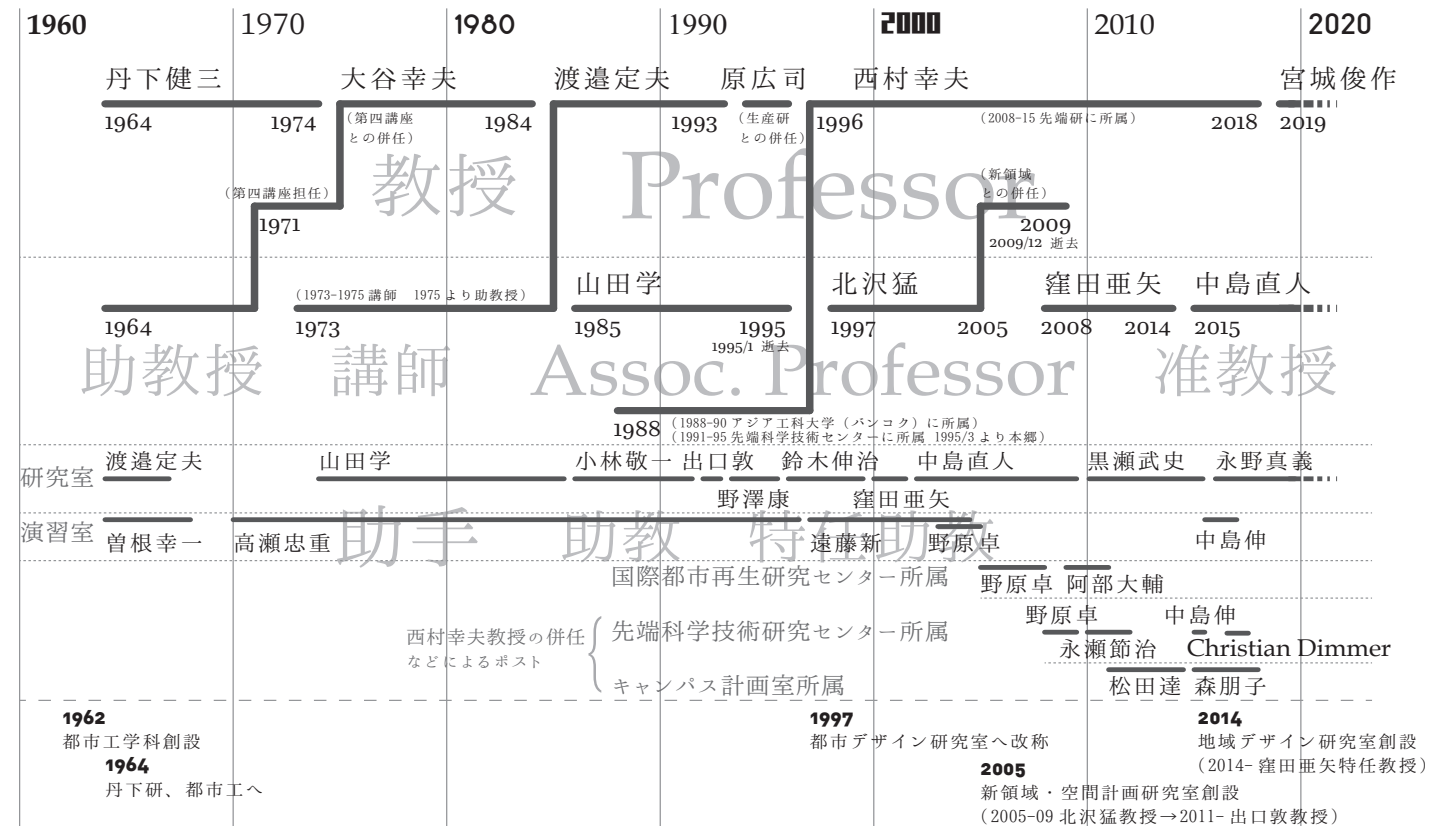
都市デザイン研究室。研究室名こそ変われど、初代教授は故・丹下健三。1962年に都市工学科が設立され、丹下研究室は1964年に都市工学科に移り、丹下健三は同学科の教授となる。今回は丹下研究室時代前半を特集する。

丹下研究室の名称は都市設計研究室。都市計画第2講座（都市設計）を担当し、初期（1967年時点）の体制は、教授:丹下健三、助教授:大谷幸夫、助手:渡邊定夫、曾根幸一。その後、教授は大谷幸夫、渡邊定夫、原広司（生産技術研究所との兼任）、西村幸夫、そして現在の宮城俊作へと至る。助教授、准教授、助手、助教なども含めた現在までの教員の変遷の過程は以下の通り。

1965年から1970年の間、研究室が取り組んだ都市スケールの計画には、スコピエ・シティセンター再建計画、磐梯猪苗代地域観光開発基本計画、上武広域都市開発基本計画、京都市都市軸計画、静岡清水地域都市開発基本計画、ポロニーヤ計画などがある。これらの当時における議論を簡単にではあるが辿った。それぞれの時代に行われた議論を知るとは、現在の都市の理解に結び付き、あるいはその理解に深みを増させよう。足りない部分は多々あるうが、この号が過去の議論を追うきっかけとなることができれば幸いである。



▲ポロニーヤ計画 模型 『新建築 1971年8月号』より



※教員変遷は、都市工名簿を基に中島直人准教授作成の資料及び、「都市デザイン研究室について 歴史」<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/about/history/>等を参照した。

本号の主要な参考資料

- 丹下健三氏に関するもの
- ・丹下健三(1985)『一本の鉛筆から』日本経済新聞社
- 丹下研究室報告書
- ・群馬県商工会議所（発行年不明）『上武広域都市開発基本計画書 一都市編一』
 - ・静岡市・清水市(1970)『静岡地域都市開発基本計画』
 - ・21世紀の日本研究会(1971)『21世紀の日本―その国土と国民生活の未来像―』新建築社
- 丹下研究室PJ紹介
- ・『新建築』36(8), p79-120, 1961-08, 新建築社
 - ・『新建築』46(8), p155-234, 1971-08, 新建築社
- 丹下研究室研究
- ・豊川斎赫(2012)『群像としての丹下研究室 戦後日本建築・都市史のメインストリーム』オーム社
 - ・豊川斎赫(2013)『丹下健三とKENZO TANGE』オーム社
- 大谷幸夫氏に関するもの
- ・大谷幸夫(2002)『建築の文脈 都市の文脈 再論 大谷幸夫講演会記録 第9回歴史・文化のまちづくりセミナー記録』歴史・文化のまちづくり研究会
- 渡邊定夫氏に関するもの
- ・渡邊定夫ほか(1983)『新建築学大系17 都市設計』彰国社
 - ・渡邊定夫編(1993)『アーバンデザインの現代的展望』鹿島出版会

- 論文など
- ・丹下健三、渡邊定夫(1965)『都市設計：その概念と方法』, 建築雑誌 (959), pp703-706, 日本建築学会
- 高山文庫所蔵文書
- ・『東京大学大学院工学系研究科講義要目 昭和45年度』
 - ・『昭和42年度学部講義要目』
 - ・都市工学科カリキュラムメモ
- その他
- ・都市工学科名簿
 - ・東京大学(1965)『東京大学一覧 自昭和三十八年度至三十九年度』
 - ・東京大学庶務部学務課（発行年不明）『東京大学一覧 自昭和四十二年度至昭和四十三年度』
 - ・東京大学学務課編（発行年不明）『東京大学一覧 自昭和四十四年度至四十五年度』東京大学
 - ・『UR』1, 都市工学科
 - ・『UR』2, 都市工学科

多くの資料に関し、中島准教授よりお貸し頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

丹下研の時代

The Period of Tange's Laboratory.

丹下健三が研究室を持ったのは1946年。建築学科の中に設立されたその研究室は、戦前・戦中に彫刻アトリエであった部屋を使っでのスタートであったという。初期に手掛けたのは戦災復興。やはり一番にあげねばならないのは、広島の戦災復興計画、そして広島市の平和記念都市計画コンペだ。

東大大学院にいた1945年に父の死の電報を受け、数日して手に入れた郷里・今治への切符（戦時中は切符に発売制限があり、長距離のものは入手困難であった）を持って猛暑の中で乗り込んだ列車の中で大きな爆弾が広島に落ちたことを聞く。尾道から今治に船で渡った彼を待ち受けたのは、広島に原爆が落ちたその同日に今治を襲った空爆での母の死であった。終戦直後に戦災復興院の委嘱で、彼は広島担当を申し出る。浅田孝・大谷幸夫・石川允と共に計画策定を行うが、1946年に彼らが現地に訪れた時には多くは決定されており、地域地区の計画に関してが主であったようである。そして1949年に平和記念都市計画コンペが行われ、丹下研は一等に選ばれて建設される。原爆ドームを残し、それを見通す軸線を通す。楽しい高校生活を送った地が破壊され、直前に父を同日に母を亡くした彼の思い入れは、戦争を歴史としてあるいはかろうじて経験者から聞くことでしか知らない我々には片鱗も想像できない強さを持ったものであったのであろう。

以下は1964年～1974年、丹下研が都市工にあった時代のプロジェクトの年表である。建築学科から都市工学科に移る以前からのものでも、1964年にかかるものは列記している。なお、一部、建築都市設計研究所の活動との区別をつけられていないものがある。

1959

- 香川県営住宅一宮団地（～1964）

1960

- 電通本社・築地再開発計画（～1964）

1961

- 代々木・国立屋内競技場設計（～1964）
- 東京カテドラル型マリア大聖堂（～1964）
- 山梨文化会館（～1967）
- 香川県立体育館（～1964）

1962

- 戦没学徒記念館（～1966）

1964

- ◆丹下健三、東京大学工学部都市工学科教授就任

1965

- スコピエ・シティセンター再建計画（～1966）
- 電通本社
- 台北聖心女子大学（～1967）
- 『日本列島の地域構造・図集』（～1967）
- 磐梯猪苗代計画（～1966）

1966

- 万国博覧会マスタープラン、マスターデザイン、お祭広場（～1970）
- 静岡新聞・静岡放送東京支社（～1967）
- 在日クウェート大使館（～1970）
- ゆかり文化幼稚園（～1967）
- 東京聖心インターナショナルスクール（～1968）
- 『上武広域都市開発基本計画報告書 一都市編一』（～1968）
- 京都市都市軸計画（～1968）
- ニューヨークのフラッシング・メドウ・文化スポーツ公園のマスタープラン（～1968）



▲広島平和公園総合計画 『新建築 1971年8月号』より

1967

- サンフランシスコのイエルバ・ブエナ・センター再開発計画のマスタープラン（～1969）
- 日本オリベッティ社総合計画（神奈川）（～1970）
- イタリア・ボローニャ市北部開発計画
- クウェート国際空港（～1979）
- 静岡新聞・静岡放送本社（～1970）

1968

- 21世紀の日本（～1970）

1969

- 静岡清水地域都市基本構想（～1970）

1971

- ルンビニ計画（～1978）
- ミネアポリス・アートコンプレックス（～1974）
- リブリノ新都市計画（イタリア）
- ボルチモア市都市再開発計画
- 在日ブルガリア大使館（～1974）

1973

- 兵庫県北摂ニュータウン
- 在日トルコ大使館（～1977）
- 在メキシコ日本大使館（～1976）
- アンダルース観光開発、マドラグ・リゾート・コンプレックス（アルジェリア）
- メッカ巡礼者のための聖地ムナ計画（サウジアラビア）
- 東京大学本部庁舎・理学部校舎（～1979）

1974

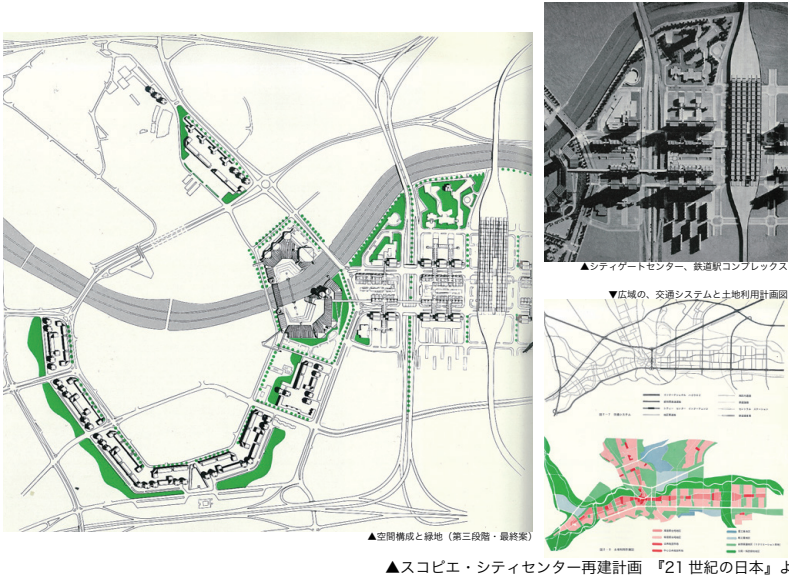
- ◆丹下健三、東京大学教授を定年退官

●：都市デザイン ■：建築設計 ◆丹下個人の動き

丹下研時代の計画を振り返る

Review the Plans in the Period of Tange's Laboratory.

丹下研において行われた 1965 年から 1970 年の間の行われた都市スケールの計画を簡単に紹介する。集積と圏域空間を一体的都市空間として線状に結合し、直線的に成長する " 都市軸 " の形成で、同心円構造から線型な都市構造への転換を主張した東京計画 1960 を他都市において展開していくことを考えている。そして

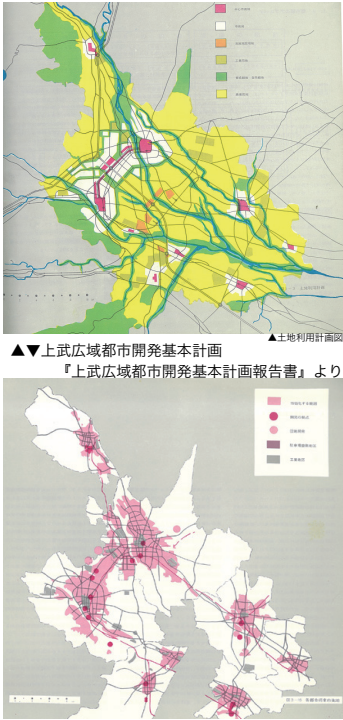


そのような都市設計方法の評価軸が必要と考え、物理的空間の視覚構造、すなわち景観評価が検討されている。当時の議論の主題としてこの 2 点が存在していた。一方でこれらの計画はそのままでは実現されない。続く時代、実現手法の検討もなされていくこととなる。

参加者：丹下健三教授、渡邊定夫助教、曾根幸一助教、磯崎新、井山武、高瀬忠重、木島安史、ジェリー・シェリーン、谷口吉生、松下一之、六角正広、渡辺俊一、荒田厚、稲岡進吾、大沼二郎、加藤源、松本敏行、山家道夫

1963 年に震災に見舞われた、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国のスコピエ（現・北マケドニア共和国の首都）の計画。UNDP（国連開発計画）による指名コンペが行われ、一等を獲得。その後現地で磯崎新、渡邊定夫、谷口吉生によって実施案の作成が行われた。広域交通体系と都心の結節点において、道路と鉄道のインターチェンジ空間装置と商業業務等の集積であるシティゲート。歴史的旧市街地のアイデンティティを顕在化する列状建築群（都心型集合住宅群）であるシティウォールが大きな提案内容である。旧駅からの南北の都市軸に対して新駅からヴァルダル川南岸の東西の都市軸への転換を提案している。ヴァルダル川に沿っているのは、都市空間が地形に反せず伸びうる方向であると言える。この中で、中央駅とシティ・ウォールは建設されたが、シティ・ゲートや行政府、議会などは建設されていない。これの背景には震災から計画決定まで、計画地における建築が止められ、中央駅より東側に市街地が展開していったという経緯も存在する。

スコピエ・シティセンター再建計画（1965-1966）



参加者：丹下健三教授、渡邊定夫助手、山田学、福沢宗道、鳥栖那智夫、荒田厚、月尾嘉男、森戸哲

上武広域都市開発基本計画（1966-68）

都市軸の形成

静岡清水の計画は両市の委嘱による丹下研、大谷研、日大・小島研の共同研究である。静岡・清水について、空中写真を見れば 1960 年代で、両都市の間に存在していた田畑はどんどん宅地等に転換され、市街地が繋がるにいたることが伺える。

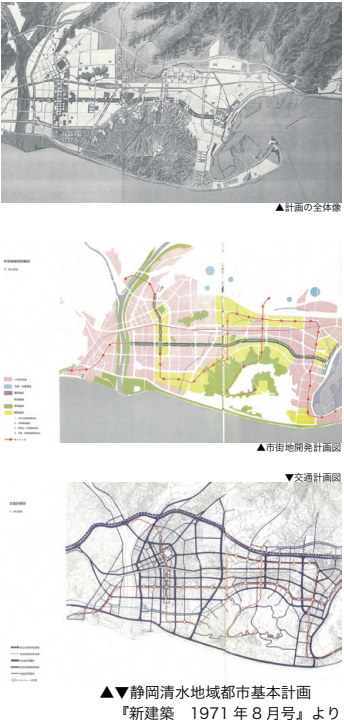
ここでは既存業務等の連結による都市軸の形成が前橋・高崎や静岡・清水という地方都市の成長の方法として検討されている。都市軸の発想は次の通り。「都心業務等集積成長の開放系。従来の都心集積と後背地は同心円構造で円滑な成長が困難であることから、集積と後背地を一つの流動系として捉え、それを直線的に連結する。」（渡邊定夫氏による）これは東京計画 1960 で提案された内容を踏襲した考えだ。

ここの提案は調査分析に基づくのみならず、新しい時代の人間像・生活像を成立させるためのものとなっている。そのような考えの下、生活環境の向上と静清地域の一体化をもちたため、「市民の足」となる交通としてモノレールとそれの通る大通り・静清幹線を、両都市の接続の骨格として提案。

都市と都市の空間的接続を、建築のみではなく交通手段の配置も検討して、構想するという点は貫かれている議論内容である。市街地が連坦していくまさにその時代、都市計画を学ぶ者は空間的接続を主要な課題として捉えていたのである。

参加者
調査分析・計画：丹下健三教授、渡邊定夫助手、鳥栖那智夫、荒田厚、松本敏行、加藤源、福沢宗道
調査分析：大谷幸夫助教、奥平耕造助手、稲岡進吾、鈴木崇英、藤井弘毅、村瀬章、水島孝治

静岡清水地域都市基本計画（1969~70）



1965

1966

1967

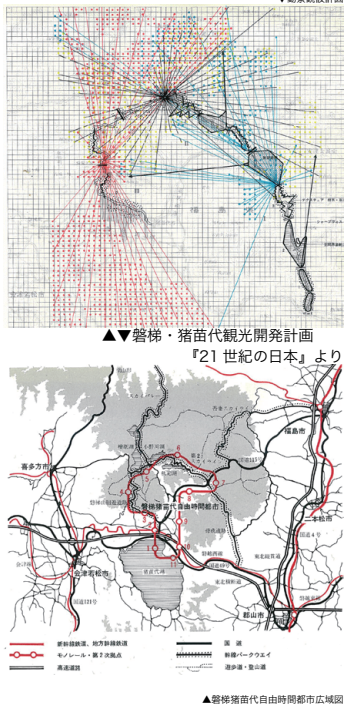
1968

1969

1970

磐梯・猪苗代観光開発計画（1966）

参加者：高山英華教授、丹下健三教授、八十島義之助教授、大谷幸夫助教、鈴木忠義助教、川上秀光助教、渡邊定夫助手、荒田厚、松本敏行、加藤源、中島泰、ジェリー・シェリーン、島淑子、石川幸央、原重一、花岡利幸、矢木咲智子、村田隆裕、白坂蕃

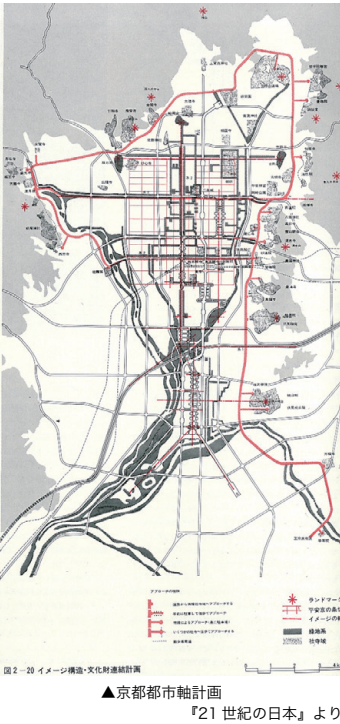


物理空間の視覚構造

磐梯猪苗代計画は、高山研、丹下研、鈴木研の共同研究。自由時間（余暇）の増大による観光需要の増大が大きなテーマとなっていた時代。自然保護・育成を実現する土地利用構造、モータリゼーションを踏まえた流動転換、高度な余暇生活を送るための観光都市創出が提案の骨子。景観は人がどこかで見るものである。このため物理的空間の視覚構造に関して議論があったようだ。その中で研究室では山田学氏が中心となって、どの地点からどこが見えるかをコンピューターで計算するモデル（左上図）を独自に作り上げている。この結果から猪苗代観光回遊道路のルートをと、各地点における眺望を基にその移り変わりが最もドラマチックとなるように結ぶことで決定し、提案している。このような景観に関する議論は、ケヴィン・リンチの『都市のイメージ』に端を発している。これは 1963 年に丹下研を修了した富田玲子氏によって翻訳が行われ、研究室に紹介されているものである。京都都市軸計画でも類似の議論が行われており、こちらでは名所旧跡についてイメージの上で見えるか見えないかという観点で種々の地点を結んでいくことが想定されている。眺望のシークエンスの観点では、この年代のいくつかの卒論・修論、そして都市デザイン研究体による『日本の都市空間』においてもⅢ 構成の技法等で扱われ、当時主要議題の一つであったことが伺えよう。

京都都市軸計画（1967-68）

参加者：丹下健三教授、渡邊定夫助手、高瀬忠重、鳥栖那智夫、福沢宗道、荒田厚、松本敏行、月尾嘉男、谷口吉生



ドットーレ・グイード・ファウンティ市長から、ボローニャ市北部の開発プランづくりを依頼されていた計画。

自然の保護、歴史の保存、新しい開発の 3 点が計画の基本として掲げられている。そして特に北部への新都心の建設と、新旧両都心の繋ぎ方について提案している。繋ぎ方としては 3 案出ていたようで、①旧都心と新都心を繋ぐ都市軸による線状構造、②それぞれの都心（将来の別の都心も考慮して）を中心とした発展が線上に繋がって形成される都市軸、③都市軸とは別の系によって繋ぐ方法である。最終的には、将来の未知の発展にも対応しうる形として、発展方向を限定しないサーカスを拠点として提案している。この地区は計画の上では新旧両都心へ交通を引き込む入口、そしてここの新都心とは別のさらなる新都心の繋ぎ方を示すものとして位置づけられている。

現実に建設されたのは、フィエラ地区センターのみである。そしてその北、すなわち新都心の計画された地には未だに農地が広がっている。当時の図面と比較すると、市街地はむしろ西に延びているようである。



参加者：丹下健三教授、渡邊定夫、岩田隆、鳥栖那智夫、荒田厚、松本敏行、加藤源、山田学助手、高瀬忠重、月尾嘉男

ボローニャ計画（1967-）



▲ボローニャ計画 『21 世紀の日本』より



渡邊定夫

1932 年、東京都生まれ。東京大学名誉教授。工学博士。東大建築学科出身。都市建築設計研究所、東大工学部助手、講師、建設工学研究会、東大工学部助教授ののち、1984 年より 1993 年まで都市設計研究室教授を務める。

丹下健三の教育

Pedagogy of Kenzo Tunge.

丹下研が担当した授業名は、学部は「都市設計第一」「都市設計第二（1967 年度までに大谷助教授に引き継がれたようである。）」「都市設計第三」「構造学第一」「構造学第二」、大学院では「都市計画特論第 2」「都市計画特論第 7（大谷助教授）」である。構造学の 2 つについては担当教官名が括弧つきでの表記であり、どのような形態であったかは定かではない。このほか、設計の演習には現在と同じく「都市工学各教官」と書かれ、丹下も関わったものと思われる。

丹下健三の忙しさ故に、どれほどの回数が開講されたかは不明である（渡邊定夫

都市工設立直後と思われる時期の講義内容

高山文庫所蔵のメモより

都市設計第一（2 年冬学期）

アーバンデザイン序説

- アーバンデザインの歴史的展開
- アーバンデザインの現代的状況
 - 人間の環境形成における成長と変化
人口成長と資本形成のダイナミックスに関連して
 - 空間組織の高度化
一人間と物物質又は情報とエネルギーのモビリティに関連して
- アーバンデザイン方法論の展開
 - 静態概念から動態概念へ
 - 機能概念から構造概念へ

都市設計第二（3 年夏学期）

都市空間論

- 都市空間の構造と形成
 - 都市空間の要素
機能概念、内部機能と外部機能、機能単位などとの関連において
 - 都市空間の構造とその媒体
構造概念の導入、コミュニケーションによるモビリティなどに関連して
 - 都市空間の形成
時間概念の導入ー成長と変化のサイクルに関連して
 - 都市のパターン
- 都市空間のイメージ
 - 空間的体験における秩序
ーヒューマン・スケール・コーディネーションについて
 - 経時的体験における秩序ーシークエンスについて
 - 機能と表現ー固有性・アイデンティティ
 - 構造と表現ーわかり易さ・コンプリヘンシビリティ
 - 意味と表現ーシンボルについて

都市設計第三（4 年夏学期）

アーバンデザインにおけるケーススタディ

1970 年度の大学院講義内容
『東京大学大学院工学系研究科講義要目 昭和 45 年度』より

都市計画特論第 2（冬学期）

- アーバンデザイン方法序説
- アーバンデザインのケース・スタディ
 - 欧米諸都市におけるデザイン的情况およびデザイン・アプローチ
 - ケーススタディ

都市計画特論第 7（冬学期）

地区再開発におけるアーバン・デザインの理念と方法

- 欧米諸都市におけるケース・スタディ
- 市街地住居と都市再開発

※講義要目の記述体裁はそれぞれの実際の体裁に近いものとした。このため、各講義において記述方法の異なる場合がある。

text_HARA / M2

先生は駒場に代講しに行ったことが幾度かあるという）が、授業内容を見れば、丹下研のプロジェクトでテーマとなっていた内容と共に、空間的な内容が多くみられる。都市のパターンと形態についてや、広場を中心とする街区スケール程度の都市の造形なども教えられていた。現在では、小スケールでの空間を重点的に取り扱う強く設計を意識した講義は都市工では少ない。

※下記の講義要目などは、工学部 14 号館図書室・高山文庫所蔵の文書による。「都市工設立直後と思われる時期の講義要目」としたものは青焼きの文書によっており、年代が確定できず、前後の書類から都市工設立直後と判断した。14 号館図書室の皆さま、お世話になりました。

1967 年度の学部講義内容

『昭和 42 年度学部講義要目』より

都市設計第一（2 年冬学期）

アーバンデザイン序説

- アーバンデザインの歴史的展開
- アーバンデザインの現代的状況
 - 人間の環境形成における成長と変化
人口成長と資本形成のダイナミックスに関連して
 - 空間組織の高度化
一人間と物物質又は情報とエネルギーのモビリティに関連して
- アーバンデザイン方法論の展開
 - 静態概念から動態概念へ
 - 機能概念から構造概念へ
- 都市空間のイメージ
 - 空間的体験における秩序
 - 経時的体験における秩序
 - 機能と表現
 - 構造と表現
 - 意味と表現

都市設計第二（3 年夏学期）

大谷幸夫担当

- 序論ー組織論の位置づけ
- 都市空間の組成
 - 構成要素と媒体
 - 構成要素の系譜
 - 媒体の機能とパターン
 - 部門別主要要素の機能と構造
- 都市空間の組織
 - 要素と媒体の相互作用
 - 要素の集合と都市空間の形成
 - 集合の型及びオーダー
 - 集合における要素の文化と結合
 - 空間の組織化と流動化

都市設計第三（4 年夏学期）

I 歴史的都市にみるアーバンデザインの手法

- 広場及び主要施設群の配置と造形
 - アゴラ・神殿
 - ホーラム及び古代ローマの諸施設
 - 中世の広場と城壁
 - 寺院・宮殿とその広場
 - 広場と市方舎（筆者注：市庁舎の誤りか）
- 都市のパターンと主要施設の分布
 - ローマ
 - ヨーロッパ中世都市
 - ルネッサンス以降
 - 奈良・京都
 - 城下町

II 現代アーバン・デザインの方法

- 現代都市への視点
- ケーススタディ

構造学第一（3 年夏学期）

構造学概説

- 構造の歴史
- 構造材料とその特性
- 構造の工法
- その他

構造学第二（3 年冬学期）

構造学各論

- 軸組構造
- アーチ、トラス、立体トラス
- シェル構造
- 吊り構造
- 擁壁及び版
- 基礎構造
- 土質構造と造成
- 路盤、その他

雨降りの日に足をのばして

Places to visit on rainy days recommended by the teachers in urban design lab.

たいていの場合、雨の日に外に出ることは億劫だろう。特に梅雨の時期をどう過ごすか迷うことは多いのではないか。けれど、少し視点を変えると、雨の日にこそ魅力が増し、訪れたい場所が見えてくる。普段は人でごった返す賑やかな場所であっても、静けさの中にただ雨音のみが聞こえる。小さな生き

宮城俊作先生に聞きました！

雨の日に訪れたい場所①

水と相性のよい素材で構成された街



神楽坂・善国寺周辺の路地

雨の日に普段とは異なる表情を楽しめる街とは、水と相性のよい素材で構成された古い街である。近代の街や建物は降雨後いかに迅速に、乾いていて足元のよい状態に戻すか、という視点で計画されていることが多い。そのために撥水性能の高い素材を用い、排水機能を充実させている。一方で近代より前につくられた街や建物は、木や石など吸水性の高い素材で構成されてお

り、雨が上がったあとと比較的長い時間、雨降りの風情を留める。そして、東京近郊でそのような素材で構成された街並みが残る代表的な場所として、神楽坂が挙げられる。

取材のため神楽坂を訪れたのは雨がさがって少し経ってからであったが、路地の舗装面や塀、建物ファサードがしっかりと艶やかに感じられた。

取材者のひとこと

中島直人先生に聞きました！

雨の日に訪れたい場所②

雨音と雨模様に包まれて



善福寺公園 上の池

晴れの日にはたくさんの人で賑わう善福寺公園だが、雨の日は様子が一变し静けさに包まれている。人影はなく聞こえるのは雨音のみ。池を周遊する手漕ぎボートは利用されず、寂しげに漂流されている。雨の日の主役は、晴れの日には人の影に隠れていた小さな生き物たちや、水に濡れて輝きを増す植物たちである。また、水滴が水面につくる模様が池の中央と端で、また変化する

る雨の強さによって異なり、眺めているそれを眺めるのも楽しい。

善福寺公園を訪れた日にはかなり激しい雨が降っていたが、池の辺りに建てられた東屋で雨音を聞きつつ PC 作業をしている人がいたことに驚いた。縁に囲まれている上、雨音によって自動車が通り過ぎる音などがかき消され、都心の喧騒から離れたどこか遠くに来たようであった。

取材者のひとこと

text_MUNENO / M1

雨の日はこう楽しむ！①

強調される奥行き感

雨の日に風景を眺めると、晴れの日より奥行きがはっきりと感じられる。晴れの日には近景と遠景の両方がくっきりと見えるが、雨の日は見ている側と遠景の間にぼんやりと白いもやがかかり、近景に比べて遠景の輪郭が曖昧になるからである。

歌川広重作「名所江戸百景」の中には数枚、雨の日の風景を表現した作品がある。隅田川に架けられていた新大橋を題材にした「大はしあたけの夕立」はその 1 つである。近景と遠景の間に無数の雨の軌跡が描かれることによって、手前の新大橋と対岸の間にいくつものレイヤーが重なっているように感じられ、奥行き感が強調された作品となっている。



歌川広重作「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」(※1)

(※1)「日本文化の入り口マガジン和楽」ホームページより引用

雨の日はこう楽しむ！②

顕在化する地形

雨は地形を顕在化させる。土地の高低差によって低地部が浸水する、といった大きな地形から、道路のちょっとしたでこぼこが水たまりになるなど小さな地形まで。水たまりは一般的に靴を濡らす面倒なもので、どう避けて歩くかということのみに意識が向いてしまうが、普段気にもとめなかった地形の存在に気づかせてくれるものだと思うと、歩くのが少し楽しくなりそうだ。



善福寺公園 散策路

雨の日の善福寺公園を訪れた際には、池を一周する散策路へ雨水がたまり、巨大な水たまりができていた。まるで池がひとまわり拡大したかのようであった。

取材者のひとこと

雨に艶めく庭を切り取る



猪股邸 夫婦室

猪股邸は昭和42年に吉田五十八（よしだいそや）によって猪股猛氏夫妻のために設計された。現在は、世田谷において区民主体の良好な景観形成を支援する「一般財団法人世田谷トラストまちづくり」によって保全されており、訪問するとガイドの方

に建築や庭園について案内してもらえる。吉田五十八とは日本橋生まれの建築家であり、荒組の障子、大壁造りの壁体、アルミ棒の下地窓など、独自の手法を用いて、数寄屋建築を近代化したことで知られる。大正12年に自身の建築設計事務所を開き、活躍の場を徐々に全国へ広げていった。晩年の作品である猪股邸と庭園の他に、改築前の歌舞伎座、成田山新勝寺本堂、元内閣総理大臣である吉田茂や岸信介の自邸など多くの作品を設計した。

駅から閑静な成城の住宅街を進むと、長

い生垣の中央に、ひっそりと門が佇んでいる。外部からは目立たないのだが、建物内部にはダイナミックな空間が広がっている。一歩足を踏み入ると広々としたモダンな居間と、雨にしっかりと濡れて艶めく庭園が視界に飛び込んで来る。モダンな空間は柱や長押、天井の回り縁といった部材をできる限り表に出さない、ミニマルな空間づくりの産物である。

猪股庭園は巨大ですっきりとした長方形の開口に切り取られ、その臨場感の大きさは、自分が庭園の内部にいると錯覚するほどであった。また、大きな開口のみならず、大小様々な開口が、庭園を美しく切り取るよう計算し尽くされた上で配されており、片時も目を離せなかった。

取材者のひとこと

猪股邸と庭園

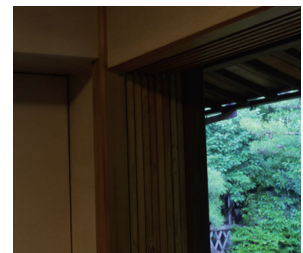
東京都世田谷区瀬田

4-4 1-2 1

小田急小田原線 成城学園前駅
より徒歩約5分

風景を際立たせる細部の意匠

猪股邸の設計において特筆すべき点は、風景の切り取り方が非常にシャープであることだ。このシャープさを実現する秘密は建具の工夫にある。大きな開口部の障子、ガラス戸、網戸の全体を、両側の戸袋に収納できるよう設計しているため、サッシなど風景を邪魔するものが全くなく、きれいな長方形でくっきりと風景を切り取ることができるのである。見学時には、実際に戸を開閉する様子を見せていただいた。



猪股邸 夫婦室の建具



猪股邸 和室の開口

Information



Hey listen, -ちょっと聞いて！

6.11 三国高校でレクチャーを実施！



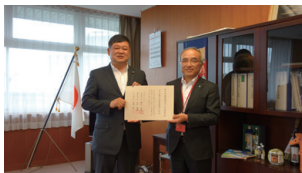
総合学習のお手伝いとして空き家についてのレクチャーを行いました。空き家を使ったイベントへのアイデアが早速出始め、本番が楽しみです！（M2 前山）

6.13 上野第3回勉強会



上野勉強会は今回も空きスナックで開催され、独特のインテリアに囲まれながら、まちのヴィジョンと空きスペースの活用について議論しました！（M1 砂川）

6.12 内子歴まち認定式



内子町歴史的風致維持向上計画が国の認定を受け、認定証の授与式が行われました。令和第1号の認定、全体では77番目の認定となります。（M2 小田島）

6.18-19 B4 オムニバス演習@小高



小高も湯島と同じくB4 オムニバス演習の対象地です。TAとしてサポート役に回りつつ、小高のまちについて自分も学ぶことができます。（M1 應武）

今月は研究室の模様替えをしました！これまでは部屋全体がオープンでしたが、本棚の配置を工夫することで、落ち着ける居場所がたくさん生まれました。

6月のWeb マガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



6.7-9 富山PJ 現地調査実施！

6月初めに富山市で現地調査を行いました。生憎の雨でしたが滞留調査をはじめ多くの収穫がありました。（M1 沼田）



6.12,14 B4 オムニバス演習@湯島

湯島での街歩きとアクティビティ調査を通して、湯島天神のL字型構造と独特な地形に着目しました。（B4 廣瀬）

7月の予定

Lab Meeting
11th, 19th, 24th

6th(Sat)	高島平 PJ ヘリテージまちあるき
7th(Sun)	富士吉田 PJ 旧郵便局調査
8th(Mon)	復興デザインスタジオ最終学内発表
10th(Wed)	手賀沼 PJ 現地活動
16th(Tue)	B3 集合住宅設計課題ジュリー
18th(Thu)	B4 オムニバス演習ジュリー
20th(Sat)	小高 PJ 復興デザインセンター交流会 富士吉田 PJ 勉強会
26th(Fri)	上野 PJ 勉強会
29th-30th	修士研究ジュリー

✧ 編集後記

研究室の過去の積み重ね、そして当時の議論の深さを知ると、そこに積み重ねるほどのものを生み出せていないのでは、という焦燥感に駆られる。明確な問題意識を持ち、今だからこそ必要な議論を行い、自分なりの回答を出していかなければ。（M2 原）